

これが最後の
ガミサシと私の
物語

土枝雄三



これが最後の
カミさんと利
の物語

土枝雄三



新潮社

これが最後の
「カミさんと私」の物語

一九八九年二月一日 発行
一九九〇年四月十五日 四刷

著者 土岐雄三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—266—5111

（編集部） 03—266—5411

振替東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

価格はカバーに表示してあります



© Michiyo Toki 1989,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-367902-6 C0095

これが最後の「カミさんと私」の物語*目次

新しいねむり薬 7

夫婦事業の閉店準備 22

願いは安楽死 41

門松は冥途の旅の一里塚 57

女人から贈られたカシミヤのマフラー 72

山本周五郎の死生観 87

救急車の中で 102

日ましに軀がこわれてゆく

117

あの世への夢の浮橋

131

たくあん石の悟り

147

生きることに肚が立つ

163

「サヨナラ」ダケガ人生ダ

180

今日を限りの煙草のけむり

196

「忍々」「耐々」

212

果てしのない妄想

227

明治大正昭和が過ぎた

242

あっさり死ねる病気になりたい

260

墓の中での御対面

274

まだ死なせてもらえない

284

わが生涯最後の乗り物

291

これが最後の「カミさんと私」の物語

新しいねむり薬

（昭和六十二年八月五日（水）晴、風強し）

永い永い間、身内にとりつき、沁み入ったねむり薬、魔女「ドリデン」が発売中止になり、遂に手許にあますところ二、三十錠。一日四錠とみてあと五、六日分しか残ってない。

「後任のくすりを」とこれまで毎月「ドリデン」購^{もと}める際、認可書（処方箋）をかい^もいて頂いていた神経科病院長、阿部完市先生（阿部先生は、医師であると同時に、著名な俳人、浦和文芸家協会副会長）に、「SOS」をカミさんに訴えて貰っていたが、今日昼すぎ、先生御身自ら、新薬ご持参ご来訪あった。

兵糧、城兵ともに、残り渺^{すく}なになった籠城に、支援の糧食、戦力をお届け下さった訳である。

新薬品名は「ユーロジン」。

みるからに、細身、瘦身。純白な軀^{からだ}は、身長（直径）六ミリ。あのドリ女は、直径約一センチだから身長、体重ともに半分しかない。しかも「ドリ」四に対して、「ユーロジン」は二錠宛服^{ずつ}用のこと、とご指示があった。

容積二分の一、服用も半分とあつては、果して眠らせてくれられるかどうか——

「——先生はおまけにお手許に残っていたこれ二瓶お持ち下さったヨ」

カミさんの手には、あの懐しの「ドリデン」百錠入り瓶が二ツあるではないか。

——ああ、ドリ公！ お前まだいたのか？

もう、この世に存在しないモノと思ひ諦めていただけに、再会の欣びは大きい。

後任「ユーロジン」が、軀に慣れるまで、附添の役に立つてくれるようにとのご意嚮か？

所詮アトのないドリ女だ。うまく「ユーロジン」が引き継いでくれればいいが。それにしても、後者は先輩に較べて、あまりにも小さく、量も少ない。

が、文句をいつている場合ではない。

山椒は小粒でもピリリと辛い——というが、ねむり薬は山椒でも、胡椒でもない。

なんとか効いてくれればよいが——何分よろしく、と呟き、夕方七時二錠のんだ。

然し、一向に効き目が現われない。

いつもは、服用後二、三十分もすれば、欠伸がでてきて、脳の中で、睡眠準備OK、「出発進行！」となるのだが、この新薬、一時間経つても二時間しても、欠伸の「ア」もでない。

眠れない。このニューフェイスは、効いてくれないのだ。

眠る——というのは、生物自然の現象の筈なのに、何故か私は薬なしでは眠れぬのだ。麻薬中毒者が、シャブ無しで暮せぬのと同じことか。

私は、思いつて、お馴染の「ドリ女」四錠追加し、のんだ。

夜は更け午前三時。流石にトロトロと眠気がさしてきた。

頭の中で、新・旧両者の声が聞える。

——やっぱり新顔のあんたじゃ、ダンナ（私自身）を眠らせられないんだよ、まア、あたしに任せておきな……

新薬「ユーロジン」の「すみません」の小声もきこえる気がする。かくて私は、約四、五時間

熟眠できた。

——ドリちゃん、お前さんはやっぱり強いねエ、「ユーロジン」なんて目じゃないヨと、私が云ってきかせると「でもねエ、ダンナ……『ユーロジン』って漢字でかけば『雄・老人』でしょ。つまりダンナとおんなじおとしよりですよ、どうしても効かない時はあたしもお手伝いしてあげるから、あの『雄老人』さんと仲よくして頂戴！」

それが、いとしの魔女、悪女「ドリデン」の別れのコトバか。「雄老人——」を精々信頼し、頼みの綱と致すと仕様。

〈八月七日（金）朝のうち小雨〉

新しいねむり薬「雄老人」は、助ッ人「ドリ公」の協力で、日を追うごとにどうやら眠らせてくれるように成った。早晩午前二時、目覚めて離床。

約五時間ほど経って七時すぎ、階下から物音が聞える。カミさんご起床の様子だ。

——かアさん、今日も元気でいてくれるか。

私は、自分が生きている以上に、老妻がこともなく元気でいてくれることがありがたい。

朝食はお定りの「トースト二枚」に「ポテト・サラダ」「ヨーグルト」「ミックス・スープ」に、「ミルクコーヒー」、それに「チーズスティック」という細長いクッキー様のモノ数本。これはもう何ヵ月前から定った朝餉だ。朝はそれでもどうやら喰える。

これが昼になると、関所の入口は堅く閉ざれ、豆腐さえ一丁は喰えない。

ビールも、一気にもみほせなくなつた。口腔内異状日増しにわるくなるばかり——夕食はぬきだが、これだけの食餌で、どうやら日一日と生き永らえていられる。

栄養もカロリーも関係ない。

思えば人間、ずい分いろいろな喰いモノをつくる。肉、魚を焼いたり煮たり、揚げたり、炒めたり、生野菜、果実、ケーキ等々――

だが私には一切無関係。口に入るものは、毎日きまりきったモノばかり。

チト、変かなと思うが、「なんだ……犬や猫、お馬や象などと同じではないか。犬はドッグフードで一生すごす。おれも到頭犬、猫並みになった」と思えば諦めがつく。

朝食後、すぐ近くにある郵便局に、ヨロメク脚をひきずり、雨の中トボトボ歩いて行く。午前八時五十分着。

局の扉はまだ閉っている。傘で雨を避け乍ら十分ほど待つ。

今日は特別記念切手「奥の細道シリーズ」第3集、「早苗とる手もとやむかしのお摺」と謳われる切手の売り出し日だ。私はこうした「特別切手」の売り出される日の朝、郵便局の前に立って、第一番に何シートか買いたいとめる。私は切手マニアでも、蒐集家でもない。ただ、こうして購めた切手を、『新潮45』の連載をきっかけに、読後感など繁くおたよりをよせてくださる人々（私は、この方々を「筆友」と勝手に呼んでいるが）に、プレゼントする習慣がいつか身についた。

国際保護鳥、いまや絶滅に瀕しておる哀鳥「トキ」に、「おたより」という名の餌をお恵み下さる方への餌代（郵便料金）である。よろめき歩く道には、大小さまざまな突起物がある。どれに躓いても、スッテンコロリン。だから、右脚左脚一歩踏みだすごとに、細心の注意を要する。恰も、ペルシャ湾内の機雷を警戒しつつ航行するタンカーさながらだ。

膝から脚、更に足首、爪先の感覚がまるで可訝しい。が、こうして求めた「切手」をその日のうちにお送りするとご返書は必ず数日うちに届く。

――それを読むのが、いまの私にとってなによりの慰めだ。まだ、お顔もしらない、お声を耳

にした事もない方々だが、「文字」を通じて、語り合い、話し合う愉しさは、また格別の味わいがある。

まだ一度もお眼にかかった事のないお人と、百年の知己のごとき友情が生れるのも、文字の故だ。封筒のおかげ、切手のおかげだ。

小雨うつ音を傘越しに耳にし乍ら、いま頃、この筆友の方々、如何時間（いかか）をすごしていただけるか、など想いは遠くに馳せる――

（八月十六日（日）晴――暑い）

――つるつる……ツルツル……

「うめエなあ、この蕎麦（そば）、ダシもいい……」

ゆうべから、親子四人連れ、家中で暑中見舞に訪れてきた次男坊一家。伴（なづか）はいかにも美味（うま）そうに蕎麦を啜（すす）っている。前の週、商用でアメリカ、カナダを廻（めぐ）ってきたばかりの彼（かれ）がいささかの疲れもみせない。齢（よわい）四十八歳、商社マンとして、いまが働き盛りなのだろう。今夜は浦和泊り、明日は朝早く、伊豆に接待ゴルフとかに出向くという。

ビールを呷（あ）り蕎麦喰う仕草も忙（いそ）がないが、諸事なにかとせつちかな奴だ。

あの蕎麦する音も懐しい。私もうまい蕎麦はずいぶん喰べた――が、それもこれも、みんな過ぎし日の憶い出。私は縁側から空を眺め、ぼんやり流れゆく雲に眼をむけていると、

――浦和は蚊が多いなァ、ホレ、こんなに喰われちゃった……

伴（なづか）が脛（むね）をボリボリ搔くのをみて、そこに薬があるヨ、とカミさんがいうと、

「おかあさん、蚊に喰われないの？」

「まァ、あんまりネ」

「そうだろうな、もう古い血だもン……蚊にしたところでうまくもない血は吸いたくないだろ」
「そういえば、私も殆んど蚊にさされる事はない。蚊いぶしも要らないし、蚊とり線香の用もない。私の血も慥かに古い。味も養分もないからかもしれないね——いや、そうじゃと思ひ直した。わが家の蚊は、おれの支配下だ。」

私はこの家のボスである。蚊の野郎ども、流石仁義は心得ているのだろう。親分の血は、絶対吸うンじゃないぞと、指令が届いているのかもしれない。

家の中は、ワイワイ賑か。そして蚊からも見放された私はひっそりと日の暮れ、夜の到来、そして眠りを待っている。

（八月二十五日（火）曇り）

昼過ぎ、また茶の間から声高な話し声、笑いが聞える——ふだんは、カミさん一人テレビの正面に坐って、ヒトコトも口をきかない。

音声はテレビの画像からでるものだけだ。

それが、このところ、相次いで人声がする。

八月一日、「小さな味方」こと孫娘が、曾孫をつれ、来泊したのを皮切りに、次男坊仗一家が

やって来、それが帰るや入れ違いに鎌倉に住む長女夫婦が泊りがけで来た。彼らが二泊三日する間に暑中休みで大阪から帰った長男は嫁さんと信州の山荘に。その留守をお守りでもするかのように、長女頼子夫婦が鎌倉からやってきて嫁に代って家事一切を担当。きっちり「順番表」がつけられているかのように、次々と連携プレーがなんともお見事。とっ換え、ひっ換え、倅、娘ども一家揃って浦和にやってくる。

そして、茶の間を賑かにし、食卓を飾り、カミさんを談笑の渦にまきこんでは帰ってゆく。そ

して、今日はいよいよ最後の出番、横浜に住む次女、範子（愛称オッコちゃん）の来訪らしい。
例によって、嫁さん泰子のはしゃいだ話し声が一際甲高い。卓袱台には、範子の土産であろう、水羊羹が並んでいた。

夕食前の一ツ刻——

カミさんを主役に、嫁の泰子相手に、範子のお喋りは続いている。

話題は、八月はじめ、次女夫婦（彼らは「山」のぼりが趣味であった）の先達で長女夫婦、山城一家を乗鞍岳に誘い、登山した時の憶い出咄、エピソードらしい。

長女の婿、山城達雄さんは、畠仕事はなよりの趣味だし、軀も鍛えてあるが、山登りの経験は殆んどない。

五十すぎた中年夫婦が、リュックを担いで、標高何千メートルの山に登るには、思いもよらぬ困惑も、難渋もあつたらしい。その上、生憎天候に恵まれず、霧にまかれ、冷たい雨にうたれ、喘ぎつつ頂上眼ざす中年、初老の娘二人に婿どの二人。併せて四人の道中のさまを、範子は、淡々と語る。いかにも、山登りの経験ある先輩面しての語り口だ。

「お姉ちゃまたちにとつては、相当きつい道中だったようね、でも、ああいう時って、妙にお互い底い合うもんだってこと、わかったわ……お姉ちゃまは達雄さんの事ああの、こうのと氣遣うし、達雄さんは達雄さんで、頼子お前はどうかだっていう具合にね、ふだん家にいるときは、ちよッと違うムードだったみたい……」

夫婦が互いに底い合う——

カミさんは、娘の話を耳にし乍ら、ジロリ私に視線をむける。

——あたし達はどうでした？ と、そんな眼差しだ。あたしは、おとうさんの事、あれこれ氣を遣つてきました。けど、おとうさんはあたしのコトは……

それから先は、もう沢山。

そろそろ、退却退散の時だ、私は二階の仕事部屋にひき揚げようとするが、カミさんはじめ娘も嫁も、あまり私の事は気にする風はない。なにかノケモノにされてるみたいだ。

私は、子供らの来泊、賑かさ、談笑からは全く無縁——

彼ら一行は、暑中休みに、わが家に避暑にくる訳ではない。カミさんを慰める意味もあるのだろうが、本当の意味は別にある——それは、故郷^{ふるさと}帰^{かえ}りだ。帰郷、墓参（わが家の墓碑は菩提寺にある亡父の墓だけだが——）。わが家には仏壇がない。世帯をもつて五十余年、子供らはじめ、誰一人死者がでないから、仏を祭り、拝む場所もないのである。女・男・女・男とカミさんの腹から生れでた子供らにとって、築後五十余年経たこのオンボロ家は、彼らにとって、終生忘じ難い懐しの居所だ。天井も壁も、柱も床も、彼らが乳児、幼児、少年少女と育ちゆくさまをじっと眺め続けた建物、諸道具だ。

茶の間の柱にぶら下っているボンボン古時計、昭和九年この家に越してきた折、親戚から贈られた品で、「十一時半」を指したまま、もう何十年も動かずにいる。

茶色に燻^{くす}んだ柱には、上の子、下の倅が、子供の頃毎年背丈を計った印もついている——

こうしたモノが、子供たちにとって、忘れられない憶い出であろう。連中は、それらを懐しみ、訪れるのに違いない。

カミさんと私も、その憶い出に繋がるイキモノなのか。

私は、茶の間の騒ぎから身を避け、仕事部屋に潜んでいると、まるで通夜に集る者たちの声をきくみたいなきがしてくる。部屋という名の柩^{うつし}にひっそり横たわっている私の耳に入る談笑や麻雀牌をかき廻す音はまるで読経か木魚の響きのようだ。

長男も次男も、もうすっかり白髪まじりのオッサンだ。